

国立ソウル大学校の発展過程にみる植民地高等教育の「遺産」 —医科大学における教員組織の変化に注目して

石川 裕之

はじめに

日本による植民統治下でおこなわれた高等教育は、第二次世界大戦後（以下、「解放後」）の韓国社会にどのような「遺産」を残していったのか。本稿では特に、植民地期に高等教育を受けた朝鮮人学生や、高等教育機関において教育・研究業務に携わった朝鮮人教員に注目し、植民地高等教育の下で育成された個人や、形成された人的ネットワークなどの「人的遺産」について検討していく。

植民地期朝鮮唯一の大学であった京城帝国大学（以下、「京城帝大」）の卒業生が、解放後にたどった進路として最も多かったのは大学教員であるという¹。そこで本稿では、国立ソウル大学校医科大学（以下、「ソウル大医大」）を考察の対象とする。その理由は第1に、京城帝大や京城大学（以下、「京城大」）の医学部、京城医学専門学校（以下、「京城医専」）はソウル大医大の前史として位置づけることができ²、これらの学校の流れを間接的にくんでいるとみなすことができるためである（図1参照）。第2に、京城帝大医学部には法文学部と比べて比較的朝鮮人教員が多かったといわれるためである。第3に、解放後にソウル大医大教員となった植民地高等教育経験者が、韓国医学界において重要な役割を果たしたためである³。なお本稿は、ソウル大医大における教員組織（教員編成および教室編成）の変化に注目する。教員組織のあり方は、高等教育機関の性格を決定づける重要な要素の1つと考えられるからである。

¹ 丁仙伊『京城帝国大学の研究』文音社、2002年、166頁。

² もちろん植民地高等教育機関と解放後の高等教育機関の関係については、様々な認識が存在する。たとえば、ソウル大学校六十年史編纂委員会編『ソウル大学校六十年史（電子資料版）』ソウル大学校、2006年では、京城帝大や京城大を序章の中で「前史」として扱っており、ソウル大の前身とは位置づけていない。またソウル大学校医科大学編『ソウル大学校医科大学史第1巻 1946-2006年』ソウル大学校医科大学、2008年においても、「どこまでも日帝による、日帝のための、日帝の機関」であるとして、京城帝大医学部はもちろん、京城医専についても前身と認めていない（同上書、3-4頁）。一方で、林光洙編『正統と正体性—ソウル大学校開校元年、なぜまさに立てなければならぬか』図書出版暮らしと夢、2009年では京城大医学部と京城医専をソウル大医大の「前身」としており（同上書、282頁）、ソウル大医大のホームページの「沿革」でも京城帝大医学部と京城医専を「前身」として言及している（2012年5月14日アクセス）。これら多様な認識が今後一定の共通認識へと収束するかどうかは未知数であるが、本稿では暫定的に京城帝大医学部、京城大医学部、京城医専をソウル大医大の前史と位置づけて論考を進めることとする。

³ たとえば、『韓国医学人物史』に収録されている近・現代の韓国医学界における主要人物のうち、京城帝大医学部と京城医専の出身者だけで55.8%を占めており、彼らの多くがソウル大医大教員を務めている（ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会編『韓国医学人物史』太学社、2008年、515-518頁）。

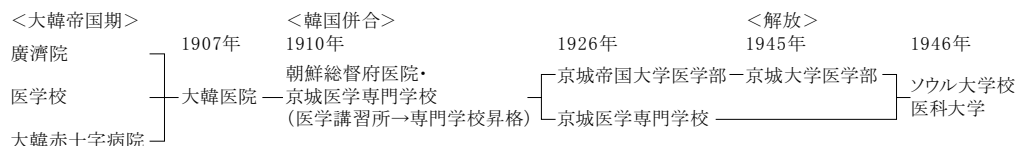


図1 ソウル大医大の歴史の変遷

出所：通堂あゆみ「京城帝国大学医学部の植民地的特徴」国際日本文化研究センター共同研究会「帝国と高等教育—東アジアの文脈」2011年度第3回研究会配付資料、2011年に筆者が加筆。

ここで本稿に関連する主な先行研究について検討しておきたい。まず、植民地高等教育が解放後の韓国的高等教育に与えた影響についての先駆的かつ最も総合的な研究としては、馬越徹の研究（1995年）⁴がある。同研究は韓国高等教育における解放前後の連続性を強く意識した研究であり、そのスタンスと知見は極めて示唆するところが大きい。一方で、同研究は主に制度や政策の変遷などマクロな視点からのアプローチをとっており、単科大学（日本の学部に対応）レベルにまで十分に踏み込むことはできていない⁵。次に、植民地高等教育経験者の解放後の地位や役割について検討している研究としては、李忠雨の研究（1980年）⁶、丁仙伊の研究（2002年）⁷、金容徳の研究（2005年、2006年）⁸などが挙げられる。しかし、いずれも研究対象が京城帝大卒業生に限られているし、主に政治エリートに着目しているため、大学という場における学術エリートの役割は明らかにされていない。一方、京城医専に注目した研究としては李賢一の研究（2010年）⁹があるが、主に植民地医学システムの形成過程を明らかにしたものであり、時期的にはあくまでも解放前を対象としている。本稿のように、植民地高等教育経験者という人的遺産に注目し、解放前後の連続性を意識しつつ、単科大学レベルにまで踏み込んだ研究は、これまでほとんどなされてこなかったといえる。

なお本稿では論考の都合上、植民地高等教育経験者の範囲を、解放（1945年8月15日）までに京城帝大医学部と京城医専を卒業した者に限定する。

1 ソウル大医大の教員編成の変遷

(1) 植民地高等教育経験者はいつ大学を去ったか

解放直前に京城帝大医学部や京城医専を卒業し、その後ソウル大医大教員となった者が定年を迎えたのは、70年代から80年代にかけてのことである。把握し得た限りであ

⁴ 馬越徹『韓国近代大学の成立と展開—大学モデルの伝播研究』名古屋大学出版会、1995年。

⁵ その背景にはおそらく、単科大学レベルを対象とした研究が馬越本人の視野の外にあったというよりは、解放前後の連続性を意識した高等教育研究とその公表に対する時代的な制約が存在していたのではないかと推察される。

⁶ 李忠雨『京城帝国大学』多楽園、1980年。

⁷ 丁仙伊、前掲書、2002年。

⁸ 金容徳「京城帝国大学（一九二四—一九四五）の教育と韓人学生」宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識Ⅱ 日帝支配期』慶應義塾大学出版会、2005年、125-144頁、金容徳「京城帝国大学韓人出身エリートの行路—高等文官試験合格者の親日および独裁体制擁護と関連して」宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識Ⅲ 一九四五年を前後して』慶應義塾大学出版会、2006年、113-125頁。

⁹ 李賢一「植民地朝鮮における医学研究の軌跡—京城医学専門学校を中心に」『アジア太平洋研究科論集』第19号、2010年、151-169頁。

るが、植民地高等教育経験者で最後に定年を迎えたのは李寧均（胸部外科学）¹⁰であったと考えられる。下の表 1 は、彼が大学を去った翌年の 1987 年時点におけるソウル大医大の教員編成を示したものである。

表 1 1987 年時点におけるソウル大医大教員の出身校

出身校	京城帝大 医学部	京城医専	京城大 医学部	ソウル大 医大	その他	不明	計
人数	0	0	1	206	6	4	217
全体に占める割合	0.0%	0.0%	0.5%	94.9%	2.8%	1.8%	100.0%
純血率	95.4%				—		95.4%

出所：合同通信社編『現代韓人名辞典』合同通信社、各年版；ソウル大学校編『ソウル大学校要覧』ソウル大学校、各年版；ソウル大学校医科大学史編纂委員会編『ソウル大学校医科大学史 1885-1978』ソウル大学校出版部、1978 年；ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会編『韓国医学人物史』太学社、2008 年；ソウル大学校総同窓会編『ソウル大人名録 2002』ソウル大学校総同窓会、2003 年などを参照。

注 1：出身校を把握できた教員のうち、解放後に京城医専を卒業した者はいなかった。

注 2：「その他」にはソウル大文理科大 2 名、ソウル大師範大 1 名、ソウル大工大 2 名、ソウル大農大 1 名が含まれる。

これをみると、植民地高等教育経験者はやはり皆無である。一方で、ソウル大医大出身者の占める割合の大きさが目を引く。これに京城帝大医学部、京城医専、京城大医学部の出身者を加えた「純血率」は 95.4%に及ぶ。しかも、「その他」の 6 名も全員ソウル大出身者である。

もちろん、純血率の高さについては、韓国医学界におけるソウル大医大の威信と医学分野の特殊性に十分留意する必要がある。たとえば、日本の旧帝大をはじめとする伝統校でも、医学部における純血率はかなり高いといわれている¹¹。しかし、こうした特殊性を勘案しても、ソウル大医大の極めて高い純血率はなお注目に値する。本稿の関心は、こうした純血率の高さが歴史的にどう形成されてきたのかという点にある。

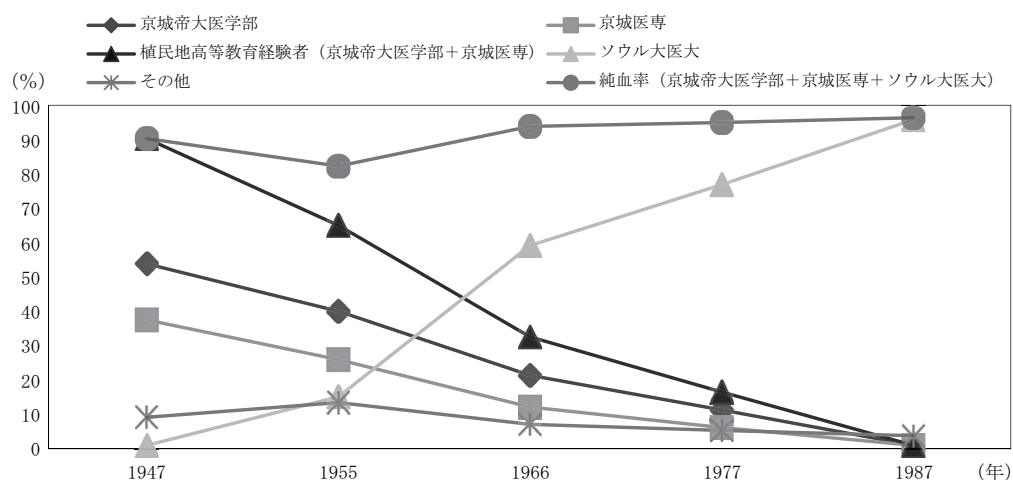
(2) 純血率の変遷

図 2 は、解放直後から 80 年代までおよそ 10 年ごとにソウル大医大教員の出身校の割合の変遷を示したものである。同校の純血率は創設期から一貫して高く、朝鮮戦争直後を除きやや上昇傾向にある。また、京城帝大医学部出身者の割合が常に京城医専出身者を上回っていることも分かる。さらに、植民地高等教育経験者の割合に急激な減少はみられず、おおむね定年退職等による自然減とみることができる。一方のソウル大医大出身者の割合は、朝鮮戦争後の復興期を除けば、およそ植民地高等教育経験者と反比例する形で増加している。ここから、旧世代（京城帝大医学部および京城医専出身者）から新世代（ソウル大医大出身者）へのバトンタッチは、約 40 年をかけて比較的スムーズにおこなわれていったと推察できる。

¹⁰ 1921 年生まれ、1944 年京城帝大医学部卒、1952 年ソウル大医大講師、1986 年定年退職。

¹¹ 1977 年時点における各大学医学部の教授全体に占める自校出身者の割合は、東大 97.7%、京大 92.7%、阪大 85.4%、慶應大 83.7%であった（神谷昭典『日本近代医学の展望—医科系大学民主化の課題』新協出版社、2006 年、194 頁）。

図2 ソウル大医大教員の出身校の割合の変遷



出所：表1に同じ。

なお、創設期のソウル大においては教職員の人事権は規定上理事会が有していたが、教員人事に関する実質的な発言権は各単科大学にあったといわれる。特に医大は教員人事に関する自律性が強く、新規教員の採用に際しては教授会の意見を聞くことが慣例になっていたという¹²。元来純血率が高く、こうした人事慣行が敷かれた下では、新規教員としては既存の教員と同窓関係や師弟関係にある者が選ばれやすくなると推察される。つまり、創設期の純血率の高さは、その後の純血率の維持・上昇に少なからず影響を及ぼしたと考えられるのである。

2 植民地高等教育の人的遺産

それでは、ソウル大医大はなぜ創設期から純血率が高かったのでしょうか。また、人的遺産という観点からみた場合、植民地高等教育はソウル大医大の教員組織にどのような影響を与えたのでしょうか。これらを明らかにするためには、解放前にまでさかのぼって考える必要がある。

(1) 植民地高等教育機関の教員編成と民族差別

京城帝大は「内地」の帝国大学をモデルとしながらも、教員と学生の民族構成において植民地大学としての限界を有していた¹³。学生数の累計では朝鮮人は日本人の約半数に過

¹² ソウル大学校二十年史編纂委員会編『ソウル大学校二十年史』ソウル大学校二十年史編纂委員会、1966年、45-46頁。

¹³ 金容徳、前掲論文、2005年、133頁。

ぎなかったが¹⁴、教員編成においてはさらに差別的な構造が存在していた。

今、京城帝大医学部（1942年時点）と京城医専（1940年時点）の教員の民族構成をみると¹⁵、京城帝大医学部の教授27名、助教授20名はすべて日本人で、講師20名のうち5名、助手36名のうち11名が朝鮮人であった。一方の京城医専では、教授18名のうち1名、助教授5名のうち1名、講師21名のうち3名、助手71名のうち47名が朝鮮人であった。助手まで含めても朝鮮人の割合は京城帝大医学部で15.5%、京城医専でも44.8%に過ぎない。さらに、両校とも朝鮮人教員の大部分は最も職階の低い助手で占められていることが分かる。

京城帝大医学部は法文学部と比べると朝鮮人教員の割合が高かったといわれるが、それでも「韓国人（ママ：引用者注）は十年以上助手でいても、講師・助教授・教授にはほとんどさせなかった」¹⁶といわれるほど高位の職階に就くことは難しかった。また京城医専の場合も、多くの朝鮮人助手によって教室運営が支えられていたにもかかわらず、彼らをそれ以上昇進させることはほとんどなかったのである。

（2）高い純血率の起源

1945年8月15日の解放によって、日本人教員の独占状態に突然転機が訪れた。京城帝大医学部でも、若手教員・医局員¹⁷と学生の代表がすぐさま「医学部自治委員会」を結成し、新しい教員の選定を含めて大学の引き継ぎ業務を進めた。1945年10月17日、京城帝大は正式に「京城大学」に改称され、22日に開学した。当初は若干の日本人教員が残留すると予想されたが、結局一斉に退去することになったという¹⁸。これまでの差別的な教員編成に対する朝鮮人側の反動も、その一因となったと推察される。

この間、医学部では大学に残っていた卒業生や、新教員の資格を有すると考えられる卒業生が毎日のように集まって議論したという¹⁹。彼らはもっぱら医局制度に基づく強固な同窓ネットワークを頼りにしつつ、高等教育機関で教育・研究に携わっている者を中心に新教員を求めた²⁰。その結果、判明している限りでも京城大医学部の新教員の84.2%が京城帝大医学部の出身者で占められることとなった（表2）²¹。

¹⁴ 古川宣子「植民地期朝鮮における中・高等教育」『日本植民地研究』第8号、1996年、27頁。

¹⁵ 京城医学専門学校編『朝鮮総督府京城医学専門学校一覽 昭和15年』京城医学専門学校、1940年および京城帝国大学編『京城帝国大学一覽 昭和17年』京城帝国大学、1943年より試算。創氏改名者については、原籍や付記された改名前の氏名等を参考に推定した。

¹⁶ 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編『紺碧遙かに一京城帝国大学創立五十周年記念誌』京城帝国大学同窓会、1974年、392頁。

¹⁷ 李國柱（1935年卒）、韓沁錫（1938年卒）、南基鏞（1941年卒）、朱槿源（1943年卒）、金弘基（1944年卒）らの名前が挙がっている（ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会、前掲書、2008年、426頁）。

¹⁸ 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会、前掲書、1974年、483頁。

¹⁹ ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会、前掲書、2008年、478頁。

²⁰ ソウル大学校二十年史編纂委員会、前掲書、1966年、42頁。

²¹ ソウル大学校医科大学史編纂委員会、前掲書、1978年、87-90頁。

表 2 解放直後における京城大医学部教員の出身校

出身校	京城帝大 医学部	京城医専	その他	不明	計
人数	48	3	4	2	57
全体に 占める割合	84.2%	5.3%	7.0%	3.5%	100.0%
純血率	84.2%	—			84.2%

注：「その他」には東京帝大 1 名、京都帝大 1 名、岡山医専 1 名、大邱医専 1 名が含まれる。

一方の京城医専についても、おおよそ事情は似ていたと考えられ²²、解放直後から新たな教員編成の整備に没頭した²³。京城医専の場合、高等教育機関で教鞭をとっている卒業生がさほど多くなかったためか、沈浩燮（1913 年卒）や白麟濟（1921 年卒）などの古参卒業生が、鄭壹千（1928 年卒）や全鍾暉（1935 年卒）など高等教育機関での教育・研究歴がある開業医を、同窓ネットワークを利用して呼び戻すという戦略を合わせてとっていたようである²⁴。こうして、判明している限りでも新教員の 91.4%が京城医専の卒業生で占められることとなった（表 3）²⁵。

表 3 解放直後における京城医専教員の出身校

出身校	京城帝大 医学部	京城医専	その他	不明	計
人数	1	32	1	1	35
全体に 占める割合	2.9%	91.4%	2.9%	2.9%	100.1%
純血率	—	91.4%	—		91.4%

注 1：「その他」には九州帝大 1 名が含まれる。

注 2：「全体に占める割合」は小数点第 2 位を四捨五入しているため、合計が 100.0%を超えている。

その後、1946 年にソウル大医大が創設された際にも、いわゆる「国大案」に反対して大学を去った一部の教員を除いて、京城大医学部と京城医専の教員編成がほぼそのまま引き継がれた。

以上から、民族差別への反動として日本人教員の全員退去が実行されたことと、医局制度に基づく同窓ネットワークを活用して短期間で新たな教員を募ったことが、京城大医学部と京城医専の純血率を高める主要因になったと考えられる。また、創設期におけるソウル大医大の純血率の高さは、前史となった学校における純血率の高さにその起源があるといえる。

²² 解放後は、高等教育機関ごとに朝鮮人教員と卒業生が自治委員会を組織し、引き継ぎ業務を遂行したという（金基奭「韓国大学発展軌跡に現れたアメリカ大学—ソウル大の場合」『アメリカ教育制度と韓国的受容』2008 年ソウル大学校アメリカ学研究所学術大会資料、2008 年、27 頁）。

²³ ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会、前掲書、2008 年、420 頁。

²⁴ 同上書、126 頁、283 頁。

²⁵ ソウル大学校医科大学史編纂委員会、前掲書、1978 年、87-90 頁。

(3)教室編成の継承と人的遺産の関係

京城帝大医学部と京城医専における比較的スムーズな引き継ぎは、その直接の後身となった学校の教室編成にも影響を与えた。

表 4 京城帝大医学部と京城大医学部の教室編成

	京城帝大医学部 (1942 年時点)		京城大医学部 (1945-1946 年頃)	
	教室	講座	教室	講座
基礎 医学系	解剖学	第 1	解剖学	
		第 2		
		第 3		
	生理学	第 1	生理学	
		第 2		
	医化学		生化学	
	微生物学	第 1	微生物学	
		第 2		
	薬理学	第 1	薬理学	
		第 2		
	病理学	第 1	病理学	第 1
		第 2		第 2
	衛生学・予防医学		衛生予防医学	
	法医学		—	
臨床 医学系	内科学	第 1	第 1 内科	
		第 2	第 2 内科	
		第 3	第 3 内科	
	外科学	第 1	第 1 外科	
		第 2	第 2 外科	
	整形外科		整形外科	
	産科学・婦人科学		産婦人科	
	皮膚科学・泌尿器科学		皮膚泌尿器科	
	眼科学		眼科	
	耳鼻咽喉科学		耳鼻咽喉科	
	小児科学		小児科	
	神経科学・精神科学		精神神経科	
	放射線医学		放射線科	

出所：京城帝国大学編『京城帝国大学一覽 昭和 17 年』京城帝国大学、1943 年；ソウル大学校医科大学史編纂委員会編『ソウル大学校医科大学史 1885-1978』ソウル大学校出版部、1978 年、87-88 頁；ソウル大学校医科大学編『ソウル大学校医科大学史第 1 巻 1946-2006 年』ソウル大学校医科大学、2008 年、30-33 頁。

注 1：京城帝大医学部の歯診療部は除く。

注 2：教室・講座名の表記は原文のままとした。表 5 も同様。

表 5 京城医専における解放前後の教室編成

	解放前（1940 年時点）		解放後（1945-1946 年頃）
	教室		教室
基礎 医学系	解剖学		解剖学
	生理学		生理学
	医化学		生化学
	微生物学・衛生学		細菌学
			衛生学
	薬理学		—
臨床 医学系	病理学・法医学		病理学
	内科学	第 1 内科	第 1 内科
		第 2 内科	第 2 内科
	外科学	第 1 外科	外科
		第 2 外科	
	—		整形外科
	産婦人科学		産婦人科
	皮膚科泌尿器科学		皮膚泌尿器（原文ママ）
	眼科学		眼科
	耳鼻咽喉科学		耳鼻咽喉科
	小児科（原文ママ）		小児科
	精神科学		—
	レントゲン学（原文ママ）		放射線科
	歯科学		—

出所：京城医学専門学校編『朝鮮総督府京城医学専門学校一覧 昭和 15 年』京城医学専門学校、1940 年；ソウル大学校医科大学史編纂委員会編『ソウル大学校医科大学史 1885-1978』ソウル大学校出版部、1978 年、89-90 頁。

注： 解放前については「修身」や「国語」等の教科担当を除く。

表 4・5 は京城帝大医学部と京城大医学部、そして解放前後の京城医専の教室（講座）編成を示したものである。これをみると、一部教室の新設・分離・消滅、規模縮小、教室名の変更などがみられるものの、教員をほぼ総入れ替えしたことを考えれば、教室編成は大幅な変更なく継承されたことが分かる。医局制度も維持され、京城大医学部の病理学教室では講座制をそのまま残している²⁶。

両校ともに自校出身者を中心として教員を編成し、教室編成も大きく変更せずに維持できたということは、十分な数でなかったかも知れないが、各教室を支えるだけの朝鮮人卒業生が育っていたということの傍証である（同時に、解放前にはその実力に見合うポストに就けていなかったことも示している）。特に当時の専門学校の場合、解放後の新たな教員編成の過程で人材不足に悩まされたといわれるが²⁷、京城医専に関しては、高い純血率が示すようにほぼ教員の自給自足が可能であった。こうした人材プールの厚さは、

²⁶ 同上書、194-195 頁。

²⁷ ソウル大学校二十年史編纂委員会、前掲書、1966 年、42 頁。

朝鮮人卒業生の優秀さ²⁸、医局制度に基づく各専攻分野の体系的人材育成システム、後述する京城帝大医学部での研究機会の提供などが影響していると考えられる。そしてさらに、この人材プールの厚さが他校出身者の参入を阻み、純血率を高める一因となったと推察することができる。

加えて、京城大医学部と京城医専の教室編成は、その後のソウル大医大の教室編成にも影響を与えた。表6をみると、ソウル大医大の教室編成は、おおそ京城医大医学部と京城医専の教室編成を重ねた形となっているのが分かる。

表6 京城大医学部および京城医専とソウル大医大の教室編成

	京城大医学部 (1945-1946 年頃)		京城医専 (1945-1946 年頃)	ソウル大医大 (1947 年頃)	
	教室	講座	教室	教室	講座
基礎医学系	解剖学		解剖学	解剖学	
	生理学		生理学	生理学	
	生化学		生化学	生化学	
	微生物学		細菌学	微生物学 (大)	
	薬理学		—	薬理学 (大)	
	病理学	第 1	病理学	病理学	第 1
		第 2			第 2
	衛生予防医学		衛生学	衛生予防医学	
—		—	医史学		
臨床医学系	第 1 内科		第 1 内科	第 1 内科 (大)	
	第 2 内科			第 2 内科	
	第 3 内科		第 2 内科	第 3 内科 (大)	
	—			第 4 内科	
	第 1 外科		外科	伝染病科 (専)	
	第 2 外科			第 1 外科 (専)	
	整形外科			第 2 外科 (大)	
	産婦人科		整形外科	第 3 外科 (専)	
	産婦人科		産婦人科	第 1 産婦人科 (大)	
	皮膚泌尿器科		皮膚泌尿器 (原文ママ)	第 2 産婦人科	
	眼科			皮膚科 (専)	
	耳鼻咽喉科		眼科	泌尿器科 (大)	
	小児科		眼科	眼科	
	精神神経科		耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	
	放射線科		小児科	小児科	
	—		—	精神神経科 (大)	
—		放射線科	放射線科		

出所：表4および表5に同じ。

注1：教室・講座名の表記は原文のままとした。

注2：表中の「(大)」は教授から講師まで京城帝大医学部出身者のみで構成された教室。

注3：表中の「(専)」は教授から講師まで京城医専出身者のみで構成された教室。

²⁸ 差別的な状況におかれていた朝鮮人学生にとって、京城帝大医学部や京城医専への入学は非常な難関であり、朝鮮全土から最優秀層が集まったという（京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会、前掲書、1974年、407-408頁；高尾茂編『馬頭ヶ丘—京城医学専門学校昭和十二年卒業五十周年記念誌』昭和十二会、1990年、278頁）。

注目すべきは教室編成の充実ぶりであり、日本人教員退去からわずか1年で、旧制度でいえば27講座に匹敵する教室編成を朝鮮人教員のみで築き上げている。限られた教育資源を最大限活用することで高い学術水準を達成するというソウル大設立の目的は、部分的ながら果たされたといえよう。

ただし、各教室の構成員にまで目を向けると、京城帝大医学部出身者のみで構成された教室と京城医専出身者のみで構成された教室が少なくなかったことに気づく（表6の注2・3を参照）。これは両校の統合が完全ではなかった証であり、植民地期に形成された同窓ネットワークが、解放後に学内派閥としてその機能を維持し続けたことを示している。両派閥間の葛藤は、後に「学士号問題」（1947年）²⁹、「ラジウム紛失事件」（1949年）³⁰、「5教授事件」（1949年）³¹といった形で表出する。こうしたソウル大医大における学内派閥の存在もまた、植民地高等教育の負の人的遺産といえるだろう。

（4）師弟間の個人的つながり

京城帝大医学部では、日本人教員が退去した後に朝鮮人の弟子や助手が教室を引き継ぐケースが多かった³²。民族的な差別構造の存在は上で述べた通りであるが、一方では「普遍性を強調する一般学問分野（医学を含む）では韓日（ママ：引用者注）間の特殊な関係が介入せず、純粋な学問的交流と、さらには相互理解が可能な深い人間的交渉で関係が結ばれる場合が多かった」³³という。たとえば、上田常吉（解剖学）と羅世振（ソウル大医大解剖学教室教授）、小杉虎一（病理学）と李濟九（ソウル大医大病理学教室教授）、杉原徳行（薬理学）と呉鎭燮（ソウル大医大薬理学教室教授）、伊藤正義（内科学）と韓沁錫（ソウル大医大内科学教室教授）などは、韓国人の手による伝記の記述からも比較的良好な師弟関係を結んでいたケースであることが窺われる³⁴。

もちろん、こうした師弟関係は、医局という特殊な空間における権威主義的な徒弟制度に支えられていた面があることは否定できない。解放後に日本人教員を全員退去させたことから、朝鮮人の弟子や助手がかつての指導教官を全面的に肯定していたかも疑問が残る。また、解放に至らなければ民族的な差別構造は維持され続けたであろうから、師弟間での引き継ぎを過剰にヒューマニスティックに捉えることには慎重であらねばならない。民族を超えた密接な師弟関係には、師を敬う韓国の伝統文化も影響している³⁵。しかし、こうした師弟間の個人的つながりが、引き継ぎ過程の混乱をいくぶん緩和した一方で、京城帝大医学部と京城大医学部の教員組織の連続性を強化する方向に作用したとも考えられる。

²⁹ ソウル大医大専門部を卒業する京城医専系の学生に学士号を授与するかをめぐり、京城帝大医学部系教員と京城医専系教員が対立した事件。

³⁰ 第二附属病院におけるラジウムの紛失をめぐり、京城帝大医学部系の教員に疑いがかけられた事件。

³¹ 京城帝大医学部系の教授5名が、思想問題を理由に行政的措置によって辞職させられた事件。

³² 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会、前掲書、1974年、483頁。

³³ 金容徳、前掲論文、2005年、141頁。

³⁴ ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会、前掲書、2008年。

³⁵ なお、韓国人卒業生と日本人教員・卒業生の間に非公式な交流が結ばれていたことを窺わせるような記述が存在するが、解放後かなり経ってから（おそらく日韓国交樹立後）のことと推察される（京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会、前掲書、1974年、211頁、275-276頁、289頁）。

(5) 出身校を超えた人材養成および交流の場としての京城帝大医学部

1926年の京城帝大医学部設立は、京城医専の朝鮮人卒業生にとって、研究継続の道が開かれたという意味で大きなインパクトを与えた³⁶。京城医専卒業生の中には、京城帝大医学部で助手や副手として研究をおこない、後にソウル大医大教員となった者も少なくない³⁷。また、開学当初に助手となった尹日善（京都帝大医学部卒）、李甲洙（岡山医専卒）、李鍾綸（京城医専卒）はいずれも助教授あるいは講師まで昇進し、解放後にソウル大医大教授となっている³⁸。

さらに京城帝大医学部の設立は、出身校を超えた若い朝鮮人医学者の交流の場ともなった。たとえば、生理学教室における李甲洙と李鍾綸の交流（解放後ともにソウル大医大生理学教室と大韓生理学会をリード）、解剖学教室における鄭壹千（京城医専卒）と羅世振（京城帝大医学部卒）の交流（解放後ともにソウル大医大解剖学教室と韓国解剖学会をリード）などが挙げられる。

もちろんこうした状況を生み出す背景には、植民地期朝鮮には大学が京城帝大ただ一校しかなく、当時の朝鮮人医学者の研究機会が極度に制限されていたことがあった。しかし、植民地高等教育の人的遺産という観点からみた場合、京城帝大医学部が出身校を超えた人材養成および交流の場として機能していたことは間違いないだろう。

おわりに

以上から、次のことがいえる。京城帝大医学部と京城医専においては、解放による日本人教員全員退去という緊急事態にあっても、強固な同窓ネットワーク、専攻分野ごとの人材プール、密接な師弟関係等によって比較的スムーズな引き継ぎが可能であった。これらを支えたのが、医局という独特な制度である。人材が払底する中、教室編成の大幅な変更を迫られることなく、ほぼ自校出身者だけで新教員を編成できたことは、民族差別、権威主義、保守主義など抑圧的な構造を内包していたものの、医局制度の残した人的遺産が緊急事態において有効に機能したケースといえよう。

しかし、むしろ医局制度が有効に機能し過ぎたことで、同制度は解放後もそのまま存続したし、人的遺産としての強固な同窓ネットワークは、純血主義と学内学閥の二重構造（すなわち、全体としてのソウル大医大閥と、その内部における京城帝大医学部閥・京城医専閥の存在）へと形を変えて定着していったのである。

なお、同じソウル大でも法科大学や工科大学では、少なくとも創設期前後に限れば医大ほど高い純血率はみられない³⁹。これには学問分野の特徴、前史に位置づけられる学校

³⁶ ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会、前掲書、2008年、413-414頁。

³⁷ たとえば、鄭壹千（解剖学）、李鍾綸（生理学）、李基寧（生化学）、金東益（内科）、全鍾暉（伝染病科）、李先根（小児科）、尹泰權（産婦人科）、韓天錫（眼科）など。

³⁸ 京城帝大医学部卒業生が副手になり始めるのは1930年以降のことである（ソウル大学校医科大学史編纂委員会、前掲書、1978年、75頁）。

³⁹ ソウル大学校工科大学50年史編纂委員会編『ソウル大学校工科大学50年史』ソウル大学校工科大学、1997年、27-28頁；ソウル大学校法科大学同窓会編『ソウル大学校法科大学百年史』ソウル大学校法科大学同窓会、2004年、233頁、248-264頁。

の設立年による卒業生の層の厚さ、卒業生の主な進路など様々な要因があるだろうが、やはり医局制度の有無が大きな変数となっていると考えられる⁴⁰。これらのことを明らかにするために、ソウル大の各単科大学における植民地高等教育の人的遺産の検討と、それらとの比較を通じたソウル大医大の特徴のさらなる明確化を今後の課題としたい。

引用文献一覧（韓国語文献もすべて日本語に訳した）

〈日本語〉（50音順）

馬越徹『韓国近代大学の成立と展開—大学モデルの伝播研究』名古屋大学出版会、1995年。

神谷昭典『日本近代医学の展望—医科系大学民主化の課題』新協出版社、2006年。

京城医学専門学校編『朝鮮総督府京城医学専門学校一覧 昭和15年』京城医学専門学校、1940年。

京城帝国大学編『京城帝国大学一覧 昭和17年』京城帝国大学、1943年。

京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会編『紺碧遙かに—京城帝国大学創立五十周年記念誌』京城帝国大学同窓会、1974年。

金容徳「京城帝国大学（一九二四—四五）の教育と韓人学生」宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識Ⅱ—日帝支配期』慶應義塾大学出版会、2005年、125-144頁。

金容徳「京城帝国大学韓人出身エリートの行路—高等文官試験合格者の親日および独裁体制擁護と関連して」宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識Ⅲ—一九四五年を前後して』慶應義塾大学出版会、2006年、113-125頁。

高尾茂編『馬頭ヶ丘—京城医学専門学校昭和十二年卒業五十周年記念誌』昭十二会、1990年。

通堂あゆみ「京城帝国大学医学部の植民地的特徴」国際日本文化研究センター共同研究会「帝国と高等教育—東アジアの文脈」2011年度第3回研究会配付資料、2011年。

古川宣子「植民地朝鮮における中・高等教育」『日本植民地研究』第8号、1996年、18-33頁。

李賢一「植民地朝鮮における医学研究の軌跡—京城医学専門学校を中心に」『アジア太平洋研究科論集』第19号、2010年、151-169頁。

〈韓国語〉（日本語読み50音順）

金基奭「韓国大学発展軌跡に現れたアメリカ大学—ソウル大の場合」『アメリカ教育制度と韓国的受容』2008年ソウル大学校アメリカ学研究所学術大会資料、2008年、27-40頁。

合同通信社編『現代韓人名辞典』合同通信社、各年版。

ソウル大学校編『ソウル大学校要覧』ソウル大学校、各年版。

ソウル大学校医科大学史編纂委員会編『ソウル大学校医科大学史 1885-1978』ソウル大学校出版部、1978年。

ソウル大学校医科大学編『ソウル大学校医科大学史第1巻 1946-2006年』ソウル大学校医科大学、2008年。

ソウル大学校韓国医学人物史編纂委員会編『韓国医学人物史』太学社、2008年。

ソウル大学校工科大学50年史編纂委員会編『ソウル大学校工科大学50年史』ソウル大学校工科大学、1997年。

⁴⁰ 通堂の研究においても、京城帝大の医学部と法文学部の最大の差として、医局制度の存在に注目している（通堂あゆみ「京城帝国大学医学部の植民地的特徴」国際日本文化研究センター共同研究会「帝国と高等教育—東アジアの文脈」2011年度第3回研究会配付資料、2011年）。

ソウル大学校総同窓会編『ソウル大人名録 2002』ソウル大学校総同窓会、2003 年。

ソウル大学校二十年史編纂委員会編『ソウル大学校二十年史』ソウル大学校二十年史編纂委員会、1966 年。

ソウル大学校六十年史編纂委員会編『ソウル大学校六十年史（電子資料版）』ソウル大学校、2006 年。

ソウル大学校法科大学同窓会編『ソウル大学校法科大学百年史』ソウル大学校法科大学同窓会、2004 年。

丁仙伊『京城帝国大学の研究』文音社、2002 年。

李忠雨『京城帝国大学』多楽園、1980 年。

林光洙編『正統と正体性—ソウル大学校開校元年、なぜまさに立てなければならないか』図書出版暮らしと夢、2009 年。

〈韓国語ウェブサイト〉

ソウル大学校医科大学ホームページ「沿革」、

http://medicine.snu.ac.kr/tmpl/sub_main.php?main_cd=1&sub_cd1=3、2012 年 5 月 14 日アクセス。